

<2018年1月>

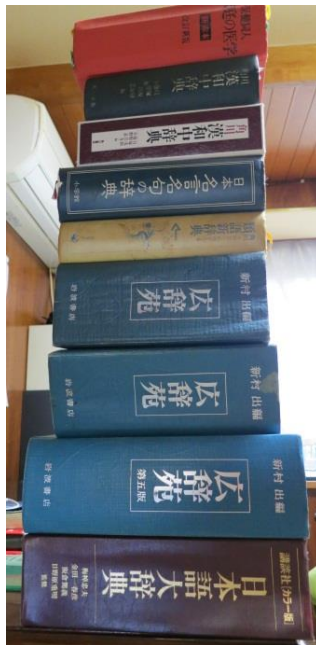
ああ、断捨離ができない

国保連合会嘱託 ひがしだ ふみお
東田 文男



「わが砦」があまりにも汚くなったので、新年早々から本の断捨離に踏み切った。とはいっても、そんなに本があるわけではない。連れ合いからしつこく部屋の整理整頓、清掃を求められ、嫌々ながらの決行となった▼読み切った本はごくわずか。積ん読がほとんどだ。「よ～し、捨てよう」。覚悟を決めて、手に本を取り中身をパラパラと、めくったのがいけなかった。「捨てるのは早い。もったいない。いつか、きっと読むはずだ。いや、必ず読む」。自分が葛藤するだけでなく、手元の本も「捨てないで」と訴えているように思えてくる▼断捨離がいつこうに進まない。「今の時代、電子辞書や電子書籍があるじゃない。パッと割り切って、捨てたらどう」。連れ合いの叱声が背後から襲う。追い打ちをかけるように「自分の寿命を計算してみたら。『いつか』読むというけれど、ま～あ、そ

んな時は来ないわね」。なんとも冷酷なご託宣である▼定年後、服の断捨離は本人が気付かないうちにやらされていたように思う。現役時代の背広（スーツ）は出番を失い、その行方すら連れ合いに聞かないと分からない。たんすの片隅に残るのは冠婚葬祭用の礼服ぐらいである。しかもお呼びがかかるのは葬祭の時ばかりである▼本の断捨離



が進まないのはなぜだろう。モノへの執着もあるが、心のどこかに、本に囲まれた自分の価値を認めたい、認めてほしいという欲求があるように思う。平たく言えば、本を通して、人間臭い「見栄」らしきものを満たしたいというわけだろうか▼断捨離はモノの執着から離れることによって、心が解放され自分らしく生きることを目指すものであるはずだ。だが、当方にとって

は自分の心の奥底に潜む俗物性にあらためて遭遇する結果となった。そして、もう一つ。断捨離は、残された自分の寿命との対話でもあると気付かされた。